
リップ・ケーション

tkkosa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リップ・ケーション

【Nコード】

N2129D

【作者名】

tkkosa

【あらすじ】

生まれながら病気を体に抱えてるミサコ、彼女と生まれたときからの付き合いのユミ、幼なじみの男の子と女の子のちょっと変わった恋愛の物語。

第0話

こういうとき、笑ったりするのがいいのかな、泣いたりするのがいいのかな。どっちにしてみようかわからなくて、なりゆきにまかせてみた。あたしは笑顔になった、すっごくほころんだ。顔のきんにくが全部ゆるくなったみたいに、にこつてにやけた。そんなあたしをみて、ユツくんもにこつてわらった。ユツくんの笑った顔がまぶしかった、あたしのだいすきな表情。いつもあたしにパワーをくれる、あたしを何倍にも、何十倍にもしてくれる。

風がひゅうつてふいて、ユツくんの髪がほのかにゆれた。あたしの髪をゆらして、ほつぺをなでて、パジャマの右っかわをひらひらさせていった。窓をあけていたから、こんなにちはってあたしの部屋にはいつてきたみたい。だめよ、おじゃまさん。今はあたしとユツくんの大切なじかんなんだから、横からわりこまないで。ふくれそうになつてると、「ねえ、ミーちゃん」ってよばれた。あたしはまたフフってほほえんで、「なあに？」っていった。

「今とおつてった風つてさ、どこに行つたとおもう？」
ユツくんの言っていることがよくわかんなくて、わかんないって顔をした。

その壁に当たってこわれちゃったんじゃない、ってあたしはこたえた。

「違うよ、その壁をスルリってとおりぬけていくんだ」

「どこまでも、どこまでも、あの風はとんでくんだよ」

へえ、すごいんだね。

そうなんだって感心しちゃった、ユツくんらしいなっておもった。

「スルっておれるなんて、とうめいにんげんみたいだね」

「そうさ、だって風ってとうめいだろ？」

ホントだ、ってあたしは驚いた。すごいってほめると、ユツくんはそんなことないよっ

て歯をみせる。ユツくんは物知りさんだ、おかげで あたしがおばかさんみたいじゃん。

ユツくんが帰るから、げんかんまで見送りにいく。「じゃあね」
ってユツくんが言っ

「うん、また明日ね」ってあたしが言う。いつものあたしたちのバイバイのしかた、右手

を小さくふってさよならする。さいごは笑顔ってきめてるの、そしてユツくんにはあ

しの笑った顔が記憶されるから。もし、あとでユツくんがあたしのことも思い出すとき、

あたしの笑った顔が出てくるように。

ドアがしまると、鍵をかけて、また2階のあたしの部屋にもどる。くちびるについた色

をおとしながら、ユツくんの温度をおもいだす。明日はグレープにしようってきめながら、

あいてた窓をキュってしめた。ベッドによこたわったら、さっきのユツくんとの会話をふ

りかえって。きょうのあたしのはんせいかい、なんかへマしてないかなっておもいかえ

して。だいじょうぶ、きょうのあたしはハナマルさん。

第1話

雨がざあざあ降っていた、朝からいっぱい降っていた。朝もざあざあ、昼もざあざあ、夜もざあざあ。おそろさん、そんなに泣かないで。泣きたいのは、あたしもおんなじだよ。

雨が降ってる日はね、ユツくんがあんまりきてくれないの。だから、あたしにいいわるしない。悲しいことがあったんなら、あたしがなぐさめてあげるから。

今日はあきらめるから、明日はおひさまも来てよね。日光をきらきらまぶしくさせてね。

この日はユツくんはやっぱ来なかった、さみしいなあ。

あたしん家とユツくん家は、おとなりさん。左の赤っぱい屋根の家があたしん家、右の青っぱい屋根の家がユツくん家。春になったら庭にタンポポがさくのがあたしん家、その後ユリがさくのがユツくん家。物置きにいらない洗濯機があるのがあたしん家、ベッチの犬小屋になってるのがユツくん家。あたしが住んでるのがあたしん家、ユツくんがいるのがユツくん家。

あたしとユツくんはおんなじ年、生まれたのもおんなじ年。ユツくんが先にうまれて、あたしがちょっと後にうまれた。それから、ずっとおとなりさん。遊ぶときもいっしょで、あたしはよくユツくんのとなりにいた。学校いくときもいっしょで、

そこはいつもおち

つく、ユツくんのとなりにいるとホツとする。ユツくんもいつつもあたしをとなりにいさ

せてくれる、いっしょにいてくれる。ありがとね、ユツくん。言葉にはしてないけど、心

の中でまいにち言ってるよ。

今日はユツくんが来てくれた、おひさまがまぶしかった。おそろさんも、昨日とちがつ

て元気いっぱい。朝おきると、カーテンをあけて、窓もあけた。おそらさんがきれいだった

た、空気がとってもおいしかった。お昼の3時ぐらいにピンポンがなって、おかあさんが

ユツくんよって言った。あたしはあいって答えて、かいだんを降りてく。あたしったら、

もう顔がわらってる。まだ、ユツくんにあってもないのに。ちょっともまてないのね、し

んぼうのダメな子。せめてユツくんにあってからにしないで、「はい」。ユツくんはげん

かんで、くつを取って、もうスリッパをはいてた。うちのスリッパはお金持ちの家のふか

ふかしたのじゃなくて、歩いてるとペコペコいってるの。あんなふかふかのはいてみたい

けど、このペコペコいってる音はあたしのお気に入り。ユツくん家のスリッパもおんなじ

なの、いっしょだね、なかよしさんだね。ユツくんはあたしの部屋にはいったら、いつも

カーペットのところにすわる。ベッドにすわって、あたしがそこにすわるからって言って

も、ユツくんはそうしない。あたしをベッドにすわらせる、いちば

んいごこちのいいところ
にいさせてくれる。

ユツくとトランプした、ババぬきとか、神経衰弱とか。15回
たたかって、あたしが
5回かった。でも、トランプって運だよね。あたしが5回しか勝て
ないってふこうへい、
運だったら1/2のかくりつじゃないの？あたしがもうちょっと勝
つてもいいんじゃない
の？あたしが口をつんとさせてたら、ユツくんがトランプやめよう
って言った。あたしが
すねてたから気をつかってくれたんだね、ごめんね。ユツくんのせ
いじゃないってわかっ
てるよ、たまたまだって。朝テレビみたとき、占いであたし11番
だったもん。今日はい
やな日だっておもってたから、大丈夫。いやなのがトランプでよか
った、だれかがケガと
かしないでよかったよ。

ユツくんが帰るって言った、時計をみたらもう6時になってた。
時間ってはやいなあ、
うれしいときって特にはやいって言ってたし。あれっ、じゃあ あ
たしは今うれしいんだね。
ユツくんとかうやっていられる時間がうれしいんだね、あたし。ユ
ツくんという時間がう
れしいってわかってうれしかった、エヘヘ。あたしの心がわらって
た、ウキウキなままで
机のおおきな引き出しをあけた。どれにしようかなってえらんでた
ら、アッとおもいだし
た。そういえば昨日、グレープにしようってきめてたんだ。忘れて
た、昨日のあたし、こ

めんなさい。グレープの口紅をとりだして、あたしのくちびるに一周させる。ぬったら、上と下のくちびるをぴったんこさせて離すの、ンマツ、ンマツ、っで。おかあさんがそうしてたから、あたしもそうしてるの。口紅をくちびるにぬるとき、そうしないといけないんだって。

あたしのくちびるに色と味がたされた、グレープの色と味。あたし、グレープすきだから、なんだかうれしいな。ひざをすりながらユツくんにちかづくと、ユツくんの顔が少しずつ大きくみえてくる。ちょっとユツくんの顔をかんさつしてみる、いつもどおりのユツくんの顔だ。ユツくんもあたしの顔をみてる、ユツくんにはあたしがどうみえてるかな。

きつとかわいくみてるよね、いつもあたしのことがわいいっていつてくれるもんね。いくよっていつて、ユツくんの顔をもう一回みる。フウって息をふいたら、あたしのくちびるとユツくんのくちびるがチュってくつつく。あたしのグレープのくちびるとユツくんのふ

つうのくちびるが。どうもこんにちは、また会いましたね、って。5秒くらいで、あたしのくちびるとユツくんのくちびるがはなれる。せつかく、こんにちはしたのに、すぐさようなら。ごめんね、でもまた会えるから、がっかりしないで。

「・・・グレープ・・・」

ユツくんがあたしの口紅をあてる、正解。いっつもあたしがしてるから、もうチュってしただけで味がわかつちゃうみたい。きつと、あたしのグレープが

ユツくんにもうつって

るんだね。あたしの好きなグレープの味が、ユツくんにもいつてるんだね。

「たしか、ユツくんもグレープ好きだったよね」

うん、ってユツくんがうなずく。あたしも好きだよ、グレープも、ユツくんも。てんび

んにかけたら、もちろんユツくんの方がおいけど。ユツくんはおきいんだよ、あたし

の中でものすっこおきいんだよ。ユツくんがいてくれるだけで元氣もらえるし、ユツ

くんとおしゃべりしてるだけで楽しくなれるんだよ。おとうさんとおかあさんとおんなじ

ぐらい、おきいんだからね。

第2話

今日は、おかあさんといっしょに病院にいつてきた。おかあさんに手をひかれて、こっ

ちよっていつもとおんなじ道があるいた。受付のおねえさんとおはなしして、待合席であ

たしのなまえがよばれるまでまつてるの。たいくつ、たいくつ、たいくつだ。病院にく

るたんび、30分くらいまつんだよ。じゃあ、30分くらいどこかであそぼうって言うて

も、おかあさんにだめっていわれるの。つまないってわかつてるのに、まつなんてイヤ。

ハズレってわかつてるクジをひいたり、負けるってわかつてるゲームをしたり、マズイっ

てわかつてるものを食べるのとおんなじだよ。そんな時間をふんわかつたイスにすわって、

ずっとまつてなきゃなんない。足をぶらんぶらんしてたらおかあさんにおこられるし、テ

レビをみてもニュースしかやってないし、アニメがみたいなんていえないし、いって

チャンネルかわんないし、携帯用のゲームは目がわるくなるから買って買ってくれないし、

家にあるマンガや本だってもうみあきてるし、つまないよ。それに、病院の空気って

きらい。だって、ほとんどの人が病気だからきたないもん。あたしの右っこにすわってる

人も、左っこにすわってる人も病気なんだよ。うつたらどうしてくれるの、とぼっち

もいいとこだよ。いろんなバイキンマンがうじゃうじゃ、あたしの回りをとんでる。おね
がいたから、あたしの中にはいつてこないでね。あたしが病気になるったら、ユツくんと
チュウできないんだから。そうしたら、責任とってもらうよ。とれないんなら、私にスツ
ってうつさないでよ。

まだですか、あたしのなまえ忘れてませんか？たいくつ、たいくつ、たいくつだ。あ
たしは検査できてるだけなんだよ、パツっておわらせたい。こんな不健康なひとたちには
さまれてるの、きらい、きらい、きらい。でも、それを口にできないあたし。おかあさん
に迷惑かける、おかあさんにおこられる、だからいえないあたし。
よわむしこむし、あた
しったら。自分にツン、ふてくされる。ユツくんがいてくれたらなあ、いつもそうめぐる。
ユツくんとおはなししてたら、30分なんてあつというまだよ。えっ、もう終わっちゃっ
たの。なんなら、もつとまってもいいのに、ってくらい。それならユツくんよべばいい
のに、って？ダメ、ユツくんはあたしだけのものじゃないんだから。あたしのわがままで
ふりまわしてばかりじゃいけないの。ホントはそうしたいよ、でもがまんもしなきゃい
けない。あたしがだだこねてばっかで、ユツくんにきらわれたらかなしいもん。

あたしのなまえが呼ばれた、きょうは35分まったよ。5分オー

バー、そのかわり次は

25分にしてね。ミリカせんせい、こんにちは。ミサコちゃん、こんにちは。1ヶ月ぶり

のせんせい、あたしの検査が月に1回だから。ミリカせんせいはおかさんより年上、お

ばあちゃんより年下。せんせいのまわりはポワポワしてて、とってもやさしい気がでてる。

だからせんせいはすき、おもしろくない検査がちょっぴりおもしろくなる。

「なにか、様子のかわったところがありますか？」

いいえ、ありません。

「外に出すぎたりしてませんか？」

いいえ、おうちの中ばっかでしたいくつです。

いつもとおんなじ質問されて、いつもとおんなじ答えをいう。いつもとおんなじ検査を

して、いつもとおんなじ結果がでる。今までどおりに生活してればだいじょうぶ、だって。

「無理はしないで、ゆっくりすごしなさい」

ミリカせんせいにいわれたから、ハイっていった。きょうの検査はこれでおしまい、ま

た来月までさようなら。おかあさんに手をひかれて、2時間前とおんなじ道があるいてか

えった。途中でおかあさんがアイスをかってくれた、おいしいな

第3話

きょうは幼稚園にいった、あたしもきょうから年長さん。年長さんってことは、年中さんや年少さんからしたらおねえさん？あたしがおねえさん、へんなの。なんだかくすぐつ

たい、タンポポの綿毛で顔をこちょこちょされてるみたい。そんなことはなしながら、バスで幼稚園までつれてってもらった。

年長さんになったって、やることはあんまりちがわない。そういつたら、ユツくんもウ

ンっていった。そうだよ、急におねえさんになるわけじゃないもんね。特に、あたしは。

あたしはまだおねえさんになれない、誰かがいないとダメだから。幼稚園にいるときは、

あたしのためにはいつもユツくんがいてくれる。ちがった、ユツくんのとなりにもいつも

あたしがいるんだ。誰かがいてくれないといけないから、ユツくんのそばにピッタリいる

の。ぜったいに他の子にとられないようにするの。

他の女の子がユツくんと遊びたいって、あたしにいつてきた。あたしは、ダメっていつ

た。なんでダメなのってきかれたから、ダメだからダメなのっていつた。そしたら、その

子があたしの背中を2回なぐった。バン、バン、って良い音がなった。痛いよ、でもこ

れでユツくんをとられなくてすむならがまんするよ。痛い痛い

とんでけ〜っ、やっぱ
痛い。

トイレいくつてユツくんにつて、トイレにいった。かえつてきたら、ユツくんがいなかった。どこっ、どこっ、かくれんぼじゃないよね。後ろからそつと来て、あたしをビツクリさせるんじゃないよね。右みて、左みて、前みて、後ろみて。
「・・・いたっ!・・・」

でも、なんで?

なんで、さっきの女の子と遊んでるの?

せんせいにきいたら、あたしが注意された。あたしがいつつもユツくんというから、他の子がユツくんと遊べない、つて。あたしもユツくんだけじゃなくて、他の子と遊びなさい、つて。なんで、なんで、あたしがおこられるの?あの女の子がユツくんを横取りしたんだよ、あたしはわるくない。なんで、なんで、ユツくんはあの女の子のところへいったの?

ユツくんが他の女の子と遊んでる、おえかきしてわらつて。ユツくんがたのしそう

なのが、あたしはさみしい。今まで、ユツくんがたのしそうなのは、あたしもたのしかつ

たのに。さみしい、さみしい、さみしいよ。体の中がキュってしぼんだ、そこにあつたか

なしいボタンがポチつておされた。涙がポツンつてさみしく出てきたから、あたしはグス

ンつてすすつた。涙がとまらないで出てきたから、あたしはンエ〜ンつてなきまかつた。

ひとつの涙がひとつのさみしさ、とまらない涙はとまらないさみし

さ。体中がさみしくな

って、いくらでもあたしの外に出ていった。エンエンないてたから、クラスの中みんな

がこつちをみてた。せんせいが「ミサコちゃん、ミサコちゃん」ってだきしめてくれてた

けど、関係ないの。あたしはユツくんがいないくてないてるの、関係あるのはユツくんなの。

そのままエンエンうずくまってないてたら、あたしのすきな声がひびいた。

「ミーちゃん・・・ミーちゃん・・・」

ユツくんの声がした。あたしを呼んでくれてる、あたしのために言葉をいつてくれてる。

あたしのところに来てくれた、他の女の子のところから来てくれた。ありがとう、ユツく

ん。体の中のさみしさをぜんぶ出すから、もうちょっとまってて。

「だいじょうぶ、ミーちゃん？」

あたしが泣きおわったら、ユツくんが心配してくれた。だいじょうぶって答えたら、よ

かったって言うてくれた。

「ミーちゃん、ごめんね」

ユツくんがあたしにあやまった、他の女の子のところにいってごめんねって。ううん、

ってあたしは首を何度もふった。

「ユツくん、ごめんね」

あたしもユツくんにあやまった、こんなことで泣いてごめんねって。あたしのせいで、

ユツくんの自由がなくなっちゃってるんだよね。すごいわかってるの、わかっててユツく

んのとなりにいるの。ホントにごめんね、あたしにはユツくんがひつようなの。あたしの

となりユツくんがいて、ユツくんのとなりにあたしがいないとダメなの。ごめんね、い
つもごめんね。

第4話

きょうは幼稚園でプール遊びの日、おっきなビニールプールにみんなではいるの。バツシャーン、バシャバシャ、ピツシャーン。さわやかな音になる、みんな気持ちよさそう。ざん

ねんながら、あたしはあの輪っかの中にはいることはできません。病院のミリカせんせい

にダメっていわれてるから。みんなが水着でつめたさとたわむれてるあいだ、あたしは校

庭のベンチで麦わらぼうしと白いワンピースで見学。みんながつめなくなってるのを見る

のも涼しかったけど、どっかむなし。なんで、あたしはあそこに入っちゃいけないの？

病気はあたしのせいじゃないんでしょ、だったら少しくらいゆるしてよ。ツンとしてたら、

せんせいがいろいろやさしく話しかけてくれた。

「ミサコちゃんはユミくんのことが好きなの？」

「うんっ、大好き」

「いいなあ、先生もユミくんが好きだよ」

「ダメだよ、ユツくんをとったら」

「大丈夫、ユミくんはミサコちゃんのものだもんね」

あたしもせんせいもニンマリわらった。せんせいは毎年あたしがプールにはいらな

い、あたしの横にいてくれる。せんせいもごめんなさい、あたしのとばっちりで。せんせい

いだってつめたくなりたいのに。

しばらくしたら、ユツくんがこっちにきてくれた。あたしがつま

んなくてふてくされて

ないかと思つて。そしたら、せんせいがユツくんにきいた。

「ユミくんはミサコちゃんのが好きなの？」

ユツくんはちよつとおどろいた顔して、あたしをすこし見た。あたしは答えが気になつ

てユツくんをジツとみてたら、ユツくんは横をむいてコクンってうなずいた。

「じゃあ、2人は両思いだね」

せんせいの言葉に、あたしははずかしくなった。うれしくて、うれしくて、はずかしく

なった。ユツくんはなにも言わないで、プールのほうに走っていく。わかつてるよ、ユツ

くん。ユツくんはあたしよりも恥ずかしがりやさんだから、にげちゃったんでしょ。

その日、幼稚園からかえったらユツくんがあたしの家にきてくれた。おととい来てくれ

たから、2日ぶりだね。ベッドにすわったあたしとカーペットにすわったユツくんはきよ

うもおしゃべり。たのしいな、ユツくんのおしゃべり。何のおしゃべりかはどうでもい

いの、誰とおしゃべりするか、それだけだから。ユツくんとおしゃべりしてることが大事

なの、あたしにとって。

「ねえ、ユツくん」

「なあに？」

きょう気になったことがあったの、だから聞いてもいい？

「ユツくんって・・・ホントにあたしのことが好き？」

あたしみたいな、わがままな女の子でいいの？

「うん、そうだよ」

あたしの目をみて言ってくれた、やっぱり幼稚園のときは恥ずかしかったんだね。せんせ

いがあたしのとりにいたから、言いづらかったんだね。うれしいよ、あたしの体には入

りきれないくらいうれしいよ。「うれしい」があたしの中でたくさんたくさんうごいてるよ。

ユツくんはあたしが好きなんだね、エヘヘ。

「あたしもユツくんのこと大好きだよ」

あたしもすきって言っちゃった。ユツくんだけ言うのはふこうへいかなって思っ、あ

たしも言った。あたしの顔がニコニコしてる、ユツくんの顔はあんまりかわらない。ガマ

ンしてるの、ユツくん？顔が恥ずかしくなるのが恥ずかしくて、やせガマンしてるんだね。

そんなところも、かわいくて好きだよ。きっと、あたしの好きが大きくてくすぐったくなっ

ちゃうんだよね。あたしがこちよこちよするから、ユツくんはもぞもぞしちゃう。

ユツくんが帰るっていった、時計をみたらもう6時をすぎてた。

そうか、6時半からユ

ツくんのすきなアニメがやるんだよね。お家に帰してあげないと、

ユツくんをユツくんの

時間にもどしてあげないと。机のおおきな引き出しをあけて、どれにしようかなってえら

んだ。ストロベリー、きょうの気分。あまくて、みずみずしくてあかい。ストロベリ

ーの口紅をくちびるに一周させる、あたしのくちびるがストロベリーになる。イチゴの赤

とくちびるの赤がたしげんで、もっとあかくなった。ふつうのおか

あさんの使ってる口紅

をぬったみたい。すこし大人になったみたい、ウフフ。

ひざをすりながらユツくんにちかづくと、フウって息をする。い
くよって言って、ユツ

くんのくちびるにあたしのくちびるをくつつけた。ユツくんすきだ
よ、チュッ。あたしの

ストロベリーのくちびるとユツくんのふつつのくちびるがピッタン
コ。あたしの大人みた

いなくちびるとユツくんの幼稚園のくちびる。ユツくんが好きなあ
たしのくちびるとあた

しが好きなユツくんのくちびる。またあいましたね、2日ぶりです
ね、っていつてる。あ

たしのくちびるがユツくんのくちびるにいつてる。5秒くらいでく
ちびるがはなれたら、

下をむいた。ユツくんが好きっていつてもらった後のチュウは、う
れしくて、はずかしか

った。ユツくんはあたしを元気にしてくれる、何倍にも、何十倍に
もしてくれる。

第5話

きょうはユツくんとおでかけ、あたしの夏休みのおもいになる日。おそらさんにはお日さまがいて、クヌギの木にはカブトムシがいて、あたしのとなりにはユツくんがいる、やったつ。

「ミーちゃん、あつくない？」

「うん、だいじょうぶ」

ユツくんが何十回もきいてくれた、心配してくれてありがとう。確かにあついのはあつ

いんだけど、それは夏だからしょうがないの。お家にいたってあついし、はだかになったってあついんだから。それにきょうは雲がでてるから、いつもより平気だよ。そのおかげで、こうやってユツくんとでかけられるんだから。

病院のミリカせんせいから、ピーカンな日はなるべく外にいかないでっていわれてるから、せつかくの夏休みでもあたしはお家にいないといけない。みんなプールにいたり、スポーツをしたり、追いかけてこしたり、すつこくたのしそうなのにあたしにはそれが禁止されてるの。雨の日になっても、外にでもプールもスポーツも追いかけてもできないし。だから、あたしが外に出れるのはこういう雲のいるときぐらい。そんなのちょびつとしかないから、あたしの夏休みは何日間かだけ。「つまんな〜い！」って、大声あげたい

けど言ってもなにもかわらないし。たいくつ、たいくつだ。そのかわり、きようは特別たのしんでやるんだから。1ヶ月半の夏休みを何日間ですべてたのしんでやる。

あたしとユツくんのだいぼうけん、しゅっぱつ。

田んぼのあぜみちをトコトコあるく、ユツくんのうしろについてトコトコあるく。右に

田んぼ、左に田んぼ、前と後ろにはぐちゃぐちゃの土と土のついた草でできた道。田んぼではおじいちゃんやおばあちゃんがお米をそだてて、こんにちは。せつせとはたらいて

忙しいですね、がんばって。あたしとおんなじ麦わらぼうし、おそろいですね。土と草

の道をシャッシャいいながら歩くと、ユツくんが急に左にまがった。「ミーちゃん、気をつけてね」

そういつて、田んぼの中のほっそい道をしんちょうにあるく。あたしもすべらないよう

に気をつけて、おそろおそろあるいた。ツルってコケて、田んぼに入ったらえらいこつち

や。白いワンピースがべちゃべちゃになって、麦わらぼうしが茶色くなつて、ユツくんに

めいわくかけて、ユツくんに嫌われちゃうかもしれない。そんなのヤダ、あたしころばな

い。なんとか歩ききつたら、目の前におっきなおっきな木があった。下を向いてほっそい

道があるいてたから全然きづかなかった、ビックリ。おっきな木は、ふつとくて、上のほ

うから何本にもわかれてた。アニメで妖怪が再生するみたく、よきによきって生えてひ

ろがつてた。

「すごい、すごい大きいよ、ユツくん」

あたしはユツくんのシャツの袖をつかんで、いっしょうけんめい言った。

「すごいでしょ、これクスノキっていうんだ」

クスノキ、それがあなたのなまえですか。どうもこんにちは、クスノキさん。あたし、

ミサコっていいいます、よろしく。

クスノキさんはあたしとユツくんが何人でもはいつちやうくらいおおきかった。あたし

とユツくんがよりかかると、2人を陰でつつんでくれた。とってもすずしかった、きもち

よかった。あたしを歓迎してくれてるのね、クスノキさん。

「すずしいね、ユツくん」

「ここなら、ミーちゃんもずっといられるかなって思って」

そうなんだ、あたしのことを考えてここに連れてきてくれたんだ。やさしいね、ありが

とね。あたし、ここ気に入ったよ。すずしいし、風につつんでもらってるみたいだし、と

なりにユツくんもいる。

そのまま、きょうはクスノキさんの下でユツくんとずっとおしゃべりした。クスノキさ

んは下からみあげてもとにかく大きかった。田んぼではたらくおじいちゃんとおばあちゃ

んが小さくみえてかわいかった。遠くにみえる山は緑がたくさんで、それがお日様の光

にあたってキレイだった。クスノキさんによりかかっておしゃべりしてるあたしたちもか

わいかった、はず。

「ありがとう、ユツくん」

帰り道できょうのお礼をした、クスノキさんのところに連れてってくれてありがとう。

どういたしまして、ってユツくんはいった。おそろさんには夕日がかんでた、オレンジ色でキレイだった。

第6話

あたしは小学生になった、黄色いぼうしと赤いランドセルがあたらしいアイテムになった

た。なんだか探検にいくみたい、ワクワク。ユツくん毎日いっしょに学校にいつて、な

るべくいっしょに学校からかえった。でも悲しいよ、ユツくんとクラスがはなればなれになつちやったから。幼稚園のときは、いつでもとなりに入れたのに。

おかあさんにいった

ら、それはいつまでもユツくんのとなりにばっかいちゃいけないってことなのよって言われた。

あたしもちよつと大人にならないといけないんだって、そう言われた。わかりました、ユツくんにあいたいけどガマンします。ただ、ユツくと遠く

になりたくはない、近く

くでいたい。だからね、これだけは言わせて。

「ユツくん、すきだよ」

いっばい気持ちをこめて言うと、ユツくんはウンってうなずいてくれる。ユツくんとい

っしょにいれる時間はへるけど、いつもユツくんの中にあたしがいてほしい。ユツくん、

すきだよ。

最初のころは、あたしはユツくんとはなれてるのをガマンするのがつらかった。ユツく

んはかつこいいし、やさしいし、かけっこも速いし、勉強はまあまあ。そんなユツくんは

女の子に人気があった、それがあたしの痛みの方ね。その中には、多分あたしよりかわいい子やきれいな子もいるはず。ユツくんがあたしから他の女の子に心がかからないかって思うと体の中がキュツとなる。あたしの近くにいて、あたしからはなれないで。あたしの、

ミサコのとおりにはいつもユツくんがいるからね。

バレンタインデーの日には、ユツくんは8コマチョコをもらってた。ユツくんは隠して

るつもりだったけど、ユツくんの黒いランドセルはパンパンにふくれてた。ちよつと切な

かったけれど、ガマン、ガマン。他の女の子たちにまけないくらい、あたしはユツくんが

すきなんだから。

きょうはあたしが呼んでたから、ユツくんがあたしの家にきてくれた。そこで、ベッド

にすわってるあたしがカーペットにすわってるユツくんチョコをあげた。

「ハイ、どうぞっ」

おかあさんに手伝ってもらって、いっしょうけんめい作ったよ。・

・ごめん、ホントは

ほとんどおかあさんが作ったんだけど。でも、あたしのすきがいっぱいはいつてるから。

「食べてもいい？」

ユツくんがいった、あたしはうれしかった。あたしのチョコだけは目の前でたべてくれ

るんだね。もしかして、あたしは他のチョコをくれた女の子たちとはちがう「特別」なの？

やったっ、あたしはユツくんのとくべつ。

「おいしいよ」

ありがと、でもおいしいかどうかはホントはどっちでもいいの。
おいしいかどうかは、
おかあさんのお手柄だから。その中にはいってる、あたしの気持ち
がユツくんの中にはい
つてくれるかなの。

その日のチュウははじめての味だった、いつものフルーツじゃない
チョコレートの味。
2人であたしのチョコを食べて、そのまま2つのくちびるがくっつ
いた。チョコの口紅が
ついたあたしのくちびるとチョコの口紅がついたユツくんのくちび
る。チョコレートの味
が口いっぱいにひろがった、あまくて少しにがかった。

第7話

あたしはいつのまにか、ユツくんのいないクラスに慣れた。もちろん、ユツくんがいないのはさみしいけれど。いっぱい友達できたし、みんなでキャッキヤはしゃいでるのは楽しかった。

ユツくんもおんなじ、いっぱい友達ができてワアワアはしゃいでた。あたしとユツくんがちがうのは、ユツくんはみんなと校庭で走り回れるけど、あたしはそんなユツくんを教室とか遠くからみてることしかできないこと。夏とかお日様がつく光つてるときは外に出れないから教室にいるし、冬とかお日様がよわつてるときも動き回れないから校庭のはしつこの方にいるくらい。いいなあ、みんながうらやましい。あたしも力いっぱいこの大きな校庭で走ってみたい。でもやんない、おとうさんやおかあさんやせんせいやみんなやユツくんに迷惑かけるから。でもねえユツくん、あたしのお願いってそんなにいけないことなのかな？ そんなにあたしが苦しくならないといけないくらい、いけないことなのかな？

体育の授業ではあたしはいつも見学、校庭のすみっこでポツンとすわってるだけ。つまらないし、さみしいし、やるせない。みんながドッジボールしてる

のや、サッカーしてる
のをみてるだけ。あたしが休むせいで、30人のクラスが29人になっちゃう。だから、
ドッジボールやサッカーをするとき、チーム分けがしにくくなる。
2チームにしても、3
チームにしても、4チームにしても、半端になっちゃう。ごめんね、
あたしのせいで。あ
たしが元気でピンピンなら、へんてこなチームにならなくていいの
にね。

きょうは寒いけど陽がでてるから、麦わらぼうしを装着。みんな
の赤白ぼうしとはちが
う、あたしだけのけ者みたい。あたしだけ体操着じゃないし、あた
しだけ運動してない。

夏なんかもつとちがう、日傘をさして見学しないといけない。みんな
などあまりにもちがう、
あたしだけとくべつ。特別って、いいこと、わるいこと、どっち？
せんせいは気をつかって、毎回けんがくしなくてもいいって言う
てくれる。教室にいて
もいいし、図書室にいてもいいし、保健室にいてもいいって言うて
くれる。あたしはそれ
をダメっていう、せめてみんなが体育をしてる場所にいたい。そこ
にいないと、ホントに
のけ者にされてる気になつてきそうだから。

ちょっと無理もしたりした、ガマンをこえたりした。夏のカンカ
ンした太陽の光がすご
くて、焼けそうにあつい日だった。どうしようか迷ったけど、あた
しは日傘をさして麦わ
らぼうしをかぶって見学した。痛いくらい太陽はひかって、眩しい
くらい太陽はかがやい

てる。あたしの体があつくなくて、さむくなった。だんだん目の前がボヤーンってしてきて、コテンって横になった。誰かの声がきこえたけど誰の声かわからなかった。

気がついたら、あたしは保健室にいた。せんせいがあたしをここまで運んでくれたみたい。安静にしてなさいって保健室のせんせいにいわれて、ベッドで横になってたら6時間

目がおわった、チャームがキンコンカンコンってなってた。外がうるさくなって

くる、みんなが下校したり、校庭であそんだりしてるから。あたしもかえりたい、たのしくかえりたい。ユツくん……ユツくん……。

「……ミーちゃん……」

目をあけたらユツくんがいた、ちよつとおどろいた。

「ミーちゃん、だいじょうぶ？」

きょうは……だいじょうぶじゃない。

「ユツくん、なんでここがわかったの？」

あたしの友達がおしえてくれた、ってユツくんはいった。あたしが体育の時間に保健室にいったって聞いて、ユツくんはきてくれた。ありがとう、ユツくん。

ユツくんはあたしに元気がでるまで、日差しがおさまる夕方までまってくれた。ユツくんといるとパワーをもらえる、それは今もかわらない。帰り道でユツくんが手をつないでくれた、あつたかかった。あたしがまだ気分がよくなかったから、ずっと元気をくれてた。

もう学校の子はみんなかえってたから、恥ずかしくなかったみたい。「ありがとう、ユツくん」

あたしは弱ってたから泣きそうになった、ユツくんのやさしさに。
ユツくん、あたし嘘
ついたかもしれない。ユツくんのいないクラスに慣れたなんていっ
たけど、あたしにはや
っぱりユツくんがいてくれないとダメみたいだよ。

第8話

次の日、学校を早退して病院にいった。検査の日じゃなかったけど、いちおうつておか

あさんに言われて。また30分まつのはわかってたから、図書室で本をかりておいた。「つ

まんない」のみなさん、きょうは相手してあげられないよ。

30分はすぐおわった、あたしの名前はいつもより早くよばれた。ミリカせんせい、こ

んにちは。ミサコちゃん、こんにちは。きょうはミリカせんせいにしつもんされて、いつ

もの検査をした。けっかは異常なし、よかった。ただ、あんまり無理しないようにってミ

リカせんせいに注意された、すいません。

お家でベッドに横になってたら、サッチがきてくれた。早退して出られなかった授業の

ことを教えにきてくれた、ありがとう。サッチはおんなじクラスで、家も10分くらいし

かはなれてないの。だから、なかよしこよしになった。ユツくんにきのう、あたしのこと

をおしえたのもサッチだった、またありがとう。

サッチとおしゃべりしてたら、ユツくんがきた。サッチとユツくんはお知り合いだから、

こんにちはって言いあった。ホントは、お知り合いになったのはきのうなんだけど。あた

しがよくユツくんの話をしてたから、サッチは昨日わざわざお知り合いでもないユツくん

のところについてくれたみたい。ユツくんは、あたしにとって大事なひとつで知ってたから。

きょうは3人でおしゃべりした、なんだか変なかんじ。サッチはあたしの友達で、ユツくんはあたしの好きなひと。だから、3人でおしゃべりしていると、ユツくんは友達っぽくはなしたり、サッチに好きなひとっぽくはなしたりしちゃいそうだった。ユツくんはよくうまく変えられるね、器用だね。それにくらべて、あたしは不器用さん。こんな不器用さんにつきあってくれてありがとう、ユツくん、サッチ。

ユツくんが帰るっていったら、サッチがあたしもっていった。2人はいつしよに帰った、さみしいな。2人がいなくなるのもさみしいし、ユツくんとチウウできなかったのもさみしい。3歳のときにしてから、あたしの家にユツくんがきたら必ずしてたのに。あ、サッチをうらんでるわけじゃないよ、タイミングがわるかったんだだけだから。

そうかんがえてたら、おかあさんに呼ばれた。なんだろうと思ったら、げんかんにユツくんがいた。ユツくんはわすれものしたって言って、あたしの家にもどってきたみたい。

「わすれものってなあに？」
またあたしの部屋まできたら、ユツくんは首をふった。
「・・・してないでしょ?・・・」

あたしの机のおおきな引き出しを指でさしながらユツくんがいった。あたしのフルーツ

の口紅がはいってる引き出し。そう、ユツくんはあたしとチュウするために戻ってきてくれたんだね。

「ユツくん、ありがとう」

あたしはいっぱい笑顔になった、ユツくんの気持ちがすっこうれしかった。

「おばさんに嘘ついちゃったけど、わすれものって」

そんなのいいんだよ、それはね優しい嘘っていうんだよ。ユツくんのやわらかい気持ち
がね、嘘もやさしくしちゃうんだよ。

「ユツくん、なにがすき？」

あたしの机のおおきな引き出しをあけてユツくにきいた。あたしのぬる口紅をユツく

んにえらんでもらうのは初めてだった。ユツくんがもどってきてくれたのがうれしくて、
そうしたくなったの。

あたしはユツくんのえらんだグレープの口紅をくちびるに一周させる。チヨコチヨコあ

るいてユツくにちかづくと、いつもとちがう感覚だった。いつもはすわりながらのチユ

ウなのに、きょうは自然に2人ともたってた。ユツくんってこんなに大きくなったんだ、

っておもった。ユツくんとの時間の長さをかんじた、ユツくんがこんなに大きくなるくらい

一緒にいるんだね、あたしたち。ちょっと背伸びして、あたしのグレープのくちびるをユ

ツくんのふつうのくちびるとくつつけた。2人とも成長してるのがわかると、なんだか背

伸びしたのと同じ分だけ気持ちも背伸びしてるような気がした。ユツくん、これからもし

っしょにいてね。ユックン、これからあたしとチュウしてね。

第9話

中学生になったら、ユツくんとおんなじクラスになった。幼稚園からだから、7年ぶり

におんなじクラスだね。ずっとユツくんとおんなじところにいれるよ、うれしいな。ユツ

くんのことみてたら、顔がわらってるってサッチにいわれた。

「ユツくんといっしょだからって、にやけすぎ」

ユツくん依存症、ってサッチにいわれた。そんなことないよ、前にくらべたら甘えなく

なってきてるもん。おかあさんやサッチがそうやって言うから、気をつけてるもん。

「中学のうちには、ミサコもユツくん立ちしないとね」

「・・・ユツくん立ちって、巢立ちってこと？」

そうよ、ってサッチがいった。なによそれ、ってあたしはおもった。

「親とか子とかならきくけど、ユツくんから巢立つってどういうこと？」

「ユツくんがいなきゃダメ、ってふうにならないようにするってことよ」

なんでよ、ユツくんがないといけないのが何でダメなのよ。

「じゃあ、高校も、大学も、その先も、ずっとユツくんのおところにいるの？」

「それは・・・」

言い返したいけど、何もいえなかった。そこまで先のことを考えたりしてなかったから。

ずっとユツくんといいたいとは思ってるけど、くわしく考えたりしたことがなかった。

「ミサコはそれがいいかもしれないけど、ユツくんはわからないでしょう？」

サッチの言ってることはもっともだった。人間は大きくなってくうちにたくさんのお会

いや別れをくりかえしてく。たくさんのおをして、おなじだけの失恋かマイナスイくつか

の失恋をする。あたしのもってる、そのたくさんのおは全部ユツくんにあけてもいい。で

も、ユツくんのもってる、そのたくさんのおをあたしが全部うばっちゃうの？そんな権利

があたしにはあるの？こんなにわがままあたしに。

ユツくんは中学生になって、身長がぐんと伸びて大人っぽくなった。あたしは中学生に

なっても、身長もあんまりのびないし大人っぽくならなかった。そんなのイヤ、あたしも

ユツくんとおなじに成長がしたい。

ユツくんのとなりにいれるようになりたいよ。これじゃ、おにいちゃんともうとみた

いじゃん。あたしとユツくんはベストカップルがいい、そうしないと不安になる。ユツく

んがそのうち、あたしにバイバイって言うっちゃうんじゃないかって「どうしたの、ミーちゃん？」

ユツくんの言葉に、あたしは正気にかえた。

「ううん、なんでもない」

あたしは笑って、そういった。きょうはユツくんがあたしのお家にきてくれた、4日ぶ

りだね。中学生になってから、ユツくんがあたしの家に来るのは1週間に2回になった。

これまでは1週間に5回ぐらいだったのに、さみしいよ。ユツくん

も部活があるからしょ

うがない、あたしはわがままなんか言っちゃいけない。ユツくん立ちができないけど、ガマンくらいしないとね。

「水泳、たのしい？」

ユツくんは水泳部にはいった、あたしは図書部で、サッチは吹奏楽部。運動をする部活

にははいれなかったから、あたしは図書部をえらんだ。図書室は静かですきだし、本もよめるし。

「泳ぐのはたのしいよ、まだ1年だから雑用がおおいけど」

そうか、運動部はたいへんだね。図書部なんて地味なところには、そんなに先輩とか後

輩とかないからね。

「今度、れんしゅう見に行くね」

ユツくんがウンってうなずいた、夕日をかぶってあったかい顔になった。

きょうはパインのチュウをした、4歳ぐらいから何百回としてきた味のチュウ。ユツく

んが帰ったあと、あたしはこうかいの気持ちになった。あたしのすきって重くないかな、

ってユツくんに聞こうとしてたから。なのに、怖がりのあたしはきけなかった。ウンって

言われたらどうしようって思ったら、聞くのをあきらめてた。

第10話

ことしも夏がきました。みんなが待ってて、あたしが待ってない夏。あたしの天敵、夏なんてキライ、キライ、キライ。お昼に外に出るのはつらいし、病院のミリカせんせいにモ気をつけるように言われてる。あたしも少しずつ成長してきて、暑さにも敏感になってきてるから。年をとることに病気とも向き合っていないといけないうっていう、ミリカせんせい談。

学校までの登校は朝はやいし、家までの下校は夕方だからいいけど、体育の見学では麦わらぼうしと日傘があいかわらずのアイテム。正直、制服に麦わらぼうしって合わないからイヤ。キャップのほうが合いそうだけど、背に腹はかえられない。格好がどうこうより、暑さをふせぐことのほうが先決。

きょうの見学はたのしみ、水泳部のれんしゅうの見学だから。きょうは図書部の当番の日じゃなかったから、プールの外から見学デー。あたしがユツくんをみterると、ユツくんがあたしにきづいた。あたしが笑顔で手をふったら、ユツくんもふりかえしてくれた。ユツくんの水着姿はりりしい、ほんのり日焼けしてて格好いい。ユツくんの泳いでる姿はまぶしい、水しぶきをあげて格好いい。

中学生になってもユツくんをすきな女の子は何人かいたけど、あたしは負けない。あたしが1番ユツくんのことをしってて、あたしが1番ユツくんの近くにいるんだから。

「ミサコはそれがいいかもしれないけど、ユツくんはわからないでしょ？」

サッチの言葉が急にうかんだ、前にサッチがあたしにいった言葉。ユツくんはたくさん

の恋をもってる、確かにそうだ。あたしがいなかったら、ユツくんはいろんな人と恋をし

ているにちがいない。じゃあ、やっぱりあたしがユツくんの恋をいくつも取ってるのかな。

ずっとユツくんといたいあたしは、ユツくんの恋を全部とろうとしてるってことだもん。

ユツくんにききたい、あたしはきゆうくつじゃないかな。

ユツくんにききたい、あたしにこまったりしてないかな。

ユツくんにききたい、あたしをイヤになったりしてないかな。

ききたい、きけない、ききたい、きけない。どうしたらいいの、

あたし。あたしの体の

中、パンパンになって弾けちゃいそうだよ。ユツくんのこと考えてると、たまにあたしが

壊れそうになっちゃうよ。

ユツくん・・・ユツくん・・・。

目をあげたら保健室にいた、モワーンってイヤな暑さがした。目をあげたってことは、

今まで目をとじてたってこと？なんで、あたし目をとじてたの？

「・・・ミーちゃん？・・・」

ユツくんの声がした、周りを見たらとなりユツくんがいた。

「・・・ユツくん、どうしたの？・・・」

いいから寝てて、ってユツくんにいわれた。あたしはユツくんに言われたとおりに、保健室のベッドに横になった。

あたしは水泳部の見学をしてるとき、プールの外で貧血でたおれたみたい。ユツくんが

ドサツって音にきづいて、あたしのいたところにあたしがいなかったからプールの柵をの

りこえて助けにきてくれて、そのまま保健室まであたしをおんぶして運んでくれた。

「・・・ありがとう・・・ごめんね・・・」

どっちを言ったほうがいいのか迷ったから、どっちもいった。助けてくれてありがとう、

迷惑かけてごめんね。せつかく、ユツくんのおうえんしようと思っで行ったのに、ジャマ

しちゃったよ。あたしのバカ、バカ、バカ。

「ユツくん、れんしゅうは？」

水着姿のまんまであたしを運んでくれたユツくんがジャージ姿だった。

「早退した、ミーちゃんが心配だったから」

あたしのために早退してくれたの？でも、それって「あたしのため」じゃなくて、「あた

しのせい」なんだよね。あたしのせいで、ユツくんが早退したんだ。あたしがユツくんの

ジャマばかりしてる、あたしがいるから。あたしがユツくんとなりにいるから・・・。

あたしは保健室のベッドの上で涙をながした、くやしくて。どうしたの、ってユツくん
がいつてくれた。

「・・・ごめんね、あたしのせいで・・・」

あたしの声がふるえてた、ヒクヒクいいながら泣いてた。

「いいんだよ、早退ぐらいワケはないんだから」

そうじゃないの、あたしが泣いてるのは。

「・・・あたしがいると、ユツくんにたくさん迷惑がかっちゃう・

・」

「・・・あたしがユツくんをすきだと、ユツくんのジャマになっちゃう・・・」

「・・・あたしのすぎがユツくんをこまらせちゃう・・・」

今までいかなかった気持ちをユツくんにいった。あたしがユツくんのお荷物になっちゃ

う不安、それでも離れられないもどかしさ。なきながら、ふるえながら、こわくなりながら、いった。

目をごしごしふいてたら、あたしに何かのつかった。かるくフワツって、あたしのくち

びるにのつかった。目をあけてみたら、ユツくんの顔がすごく近くにある。あたしの目の

すぐそこにユツくんの目がある。あたしのくちびるにユツくんのくちびるがのつかった。

あたしのふつうのくちびるとユツくんのふつうのくちびる。フルーツの口紅もぬってない、

ただのあたしのくちびる。はじめて、あたしの普通のくちびるとユツくんの普通のくちび

るが合わさった。味がなくて、へんな感じがした。いつもよりピツタリしてて、ちょっ

ぴりエッチな感じがした。2つのくちびるがさよなると、あたしはビツクリで涙がと

まっていた。

「ミーちゃん、だいじょうぶ？」

だいじょうぶって言いたかったけど言えなかった、かわりにウン

ってうなずいた。はじ

めて、ユツくんのほうからチュウしてもらった。うれしくて、はづかしくて、たまんなか

った。体の中がドクンドクンなってた、とまんないくらい。これまでいっぱいチュウして

きたのに、ものすごい緊張してる。あたし、こんなにこんなにユツくんが好きなんだ。

「・・・ユツくん・・・」

ユツくんのとなりにいたいよ、ユツくんを好きでいたい。

「・・・あたしのすき、重くない？・・・」

おもくないって言って、おねがい。

「ううん、ミーちゃんのすき、うれしいよ」

ホントに？あたしに気をつかつてるんじゃない？

「・・・ユツくんをすきな、他の女の子もいるよ・・・」

その子たちのほうがユツくんは迷惑かからないんだよ。あたしみた、お荷物になった

りしないんだよ。

「特別なんだよ、ミーちゃんは」

「1番すきな特別な女の子なんだよ」

そういつて、ユツくんがもう一回チュウしてくれた。温かくて、苦くて、大人の味がす

るチュウ。これまでで1番ながい、30秒のチュウはあたしをあたらしい世界につれてつ

てくれた。あたしのくちびるがユツくんのくちびるとさよならしたくない、って。

2つのくちびるがはなれると、すごく恥ずかしくなった。体の中のドクンドクンがとま

んなくて、ホッペや耳が真っ赤になった。ガマンできなくなって、あたしは布団をガバッ

ってかぶる。ドクンドクンをおさえようと、胸のところをギュッ

ておさえる。ユツくん

が心配するといけないから、あたしは独り言をいつてた。「ありがとう」「だいじょうぶ」「うれしい」って、ずっといつてた。

第11話

きょうはあたしのたんじょうび、14さいのたんじょうび。パンパカパーン、おめでと

〜。うれしいけど心配、あたしみたいな子供が14さいになっていいのになって。ユツク

んもサツチも14さいだけど、2人ともあたしより大人だもん。

「あたし、もう1回、13さいをしたほうがいいのかな？」

となりのユツクんにいった。

「じゃあ、また2年生をやるの？」

となりのユツクんがいった。それはイヤ、ユツくんが3年生になつて、あたしだけ2年

生なんて。ただでさえ、あたしの体はよわっちいのに。ユツくんまでうばわれるなんて、ぜったいにイヤだよ。

田んぼのあぜみちをユツくんのうしろについてトコトコあるく。

右に田んぼ、左に田ん

ぼ、前と後ろにはぐちゃぐちゃの土と土のついた草でできた道。暑いときにはせつせつ

せ汗かきながらはたらいてる、おじいちゃんやおばあちゃんもいない。おそらさんがくる

くなつてくから、もうみんな帰っちゃったみたい。土と草の道をシヤッシャいいながら歩

くと、ユツくんが左にまがった。

「ミーちゃん、気をつけてね」

うん、だいじょうぶだよ。もう何十回もあるいてるから、なれてるよ。なのにユツくん

はいつも気をつけてって言うてくれる、やさしいな。ほっそい道があるききると、目の前

におっきなおっきな木があった。こんにちは・・・じゃないね。こんばんは、クスノキさ

ん。ミサコだよ、またユツくんといっしょにきたよ。

「ごめんね、どこにもつれてつてあげられなくて」

いいんだよ、ユツくん。あたしもユツくんも部活だったんだから、その後から遠くに

くなんて無理だし。それに、あたしの体じゃあ遊園地とかにつれてつてもらっても、ほと

んどの乗り物に乗れなくてせつなくなるから、せつかく来たのにつて。だからいいの、気

にしないで。あたし、ユツくんといっしょならどこだってうれしいよ。

「すずしいね、ひんやりしてて気持ちいい」

クスノキさんはあたしとユツくんがよりかかると、2人を陰でつつんでくれた。あたし

のたんじょうびをお祝いしてくれてるみたいに、クスノキさんの上のほうの枝がユツサユ

ツサゆれてた。あたしのためにダンスをしてくれてるの、クスノキさん？ありがとう、と

つてもうれしいよ。

クスノキさんを通つてく風は、あたしの体をふんわり通つてった。1時間くらい、クス

ノキさんの下でユツくんとずっとおしゃべりした。周りはまっくらだったけど、となりに

ユツくんがいるから安心だし、クスノキさんも守ってくれてるからもつと安心だった。

「キレイだね、ユツくん」

おそらさんに、お星さんがたつくさん光ってる。ピカンピカン、

あたしたちを照らしてくれてる。お星さんたちも、あたしのたんじょうびをお祝いしてくれてるのかな。ありがとう、ありがとう。

しばらく星をながめてたら、ユツくんによばれた。なあにつて振り向いたら、急にひっぱられた。あたしの背中から、ユツくんが両手でグツっておしつけた。あたしの体とユツくんの体がくつつく、ユツくんにギュツってだきしめてもらってた。あたしの体の中がドクンドクンいつてる、はじめてユツくんにギュツってされて。ドクンドクンがどんどん大きくなって、すごく恥ずかしかった。あたしの体とユツくんの体がくつついてるから、あたしのドキドキがすぐユツくんにわかったちゃう。はずかしい、はずかしい、はずかしい。でも、あたしは何もしないで、ずっとユツくんにだきしめてもらった。はずかしいけど、それよりもうれしかったから。ユツくんのおおきな体につつまれてると、ほんわかする。いつもプールの外からみてる、水着姿のときのユツくんのりりしい体。あたしのよわっちい体にはない、あつたかさがある。ユツくんはあたしをだきしめながら、あたしにチュウしてくれた。中のぜんぶがユツくんにつばわれちゃうみたい。このまま、ユツくんとあたしがひとつになっちゃうみたい。素敵だね、あたしとユツくんは2人でひとつなんだよ。2人じゃない

とひとつにならないの、いっしょにいないとひとつになれないんだよ。

「ミーちゃん、すきだよ」

ユツくんは、あたしに何回もチュウしてくれた。1回、1回、あたしの体の中はキユン

つてしぼんだ。ありがとう、ユツくん。あたしもユツくんがだいすきだよ。これからあ

たしのとなりについて、ユツくんのとなりにいさせてね。

第12話

きょうは検査の日、月に1回だけ病院に行く日。あたしのとなりにおかあさんはもうい

ない、もう1人で全部できるようになったから。1人で病院にいけるし、1人で受付の人

とおしゃべりできるし、1人で検査も受けれるし。もしかして、あたしもちよつと大人に

なったのかな、エヘヘ。待合室でも今までみたいにたいくつに過ごしたりしないの。学校

の宿題とか、試験勉強とか、中学生になるとたいへんなんだから。

30分なんてすぐだよ、

チチンプイプイって魔法かけたみたいにあつというま。

ミリカせんせい、こんにちは。ミサコちゃん、こんにちは。いつもの挨拶をして、いつ

もの質問をうけて、いつもの検査をする。結果もいつもどおり、異常なし。

「ミサコちゃんは、いつも健康だね」

えっ、どこが？麦わらぼうしをかぶったり、日傘をさしたりして時々たおれちゃう子

のどこが。はてなマークだよ、ミリカせんせい。

「ミサコちゃんみたいな病気の人はね、みんな1回はおおきな症状を起こすのよ」

おおきな症状、って？

「小さい子って無茶したりするでしょ、日光はダメっていつても海にはいたり」

そりゃ、あたしだっておんなじだよ。海には行って、バsshンバsshンおもいつき

り泳いでみたい。飛行機にのって、おそさんの近くでこんにちは
って言ってみたい。遊

園地にいって、ユツくんと乗り物に乗ってたのしいデートがしたい。
こうみえても、あた

しだってたつくさんガマンしてるんだから。

「ミサコちゃんにはそれがないの、ミサコちゃんぐらいの年までにはあるはずなのに」

それって、あたしが優秀さんってこと？あたし、みんなのお手本になるような人ってこ

と？あたしもやればできるんだね、えっへん。

「ミサコちゃんには、なにか特別な予防線があるのかな？」

予防線、って？

「いつも健康に気をつかってる人が長生きできるとか、病気になるいとか」

そういう気づかいが何かあるのかもね、っていわれた。あたしはいろいろ考えたけど、

何もおもいつかなかった。なんなんだろう、あたしの予防線って。

あたしを優秀さんにさ

せてくれる、予防線って。

「でも、これから大きな症状が起こるかもしれないから気をつけてはおいてね」

はい、ミリカせんせい。

第13話

あたしもめでたく、中学をそつぎょう。そして、ユツくんとおんなじ高校にもごうかく。

あたし、よくがんばった。はくしゅ、パチパチパチ。

「3年間、またいっしょだね」

あたしが笑顔でいうと、ユツくんが笑顔でウンっていつてくれた。「でも、きょうから3日もはなればなれだね」

あたしたちは、おんなじ新幹線にのつてた。おんなじ新幹線だけど、行き先はべつべつ。

あたしは京都、ユツくんは大阪。きょうはクラスのみんなで卒業旅行、男の子は大阪、女の子は京都にむかう途中。男女べつべつだから、あたしとユツくん

もべつべつ。京都と大

阪ってちかいけど、あたしたちにとっては遠い。おとなりさんのあたしとユツくんにとつ

て、京都と大阪はすごい遠距離。でも、3日ならガマンするよ。あさつての夜には、ま

たおとなりさんだからね。

京都についたら、あたしは新幹線をおりた。ユツくんは新幹線にのつたまま、ピューっ

て向こうのほうに走っていった。ユツくん、ちょっとだけさよなら。

京都はとってもキレイだった、本で見るよりずっとキレイだった。すずしいけど、あつ

たかい。風がぴゅうぴゅうして涼しいのに、あたしの体の中はほんのりしてる。ユツくん

にもみせてあげたいな、写真なんかじゃなくてここで。ユツくん、

いつか2人でここに来ようね。

「こらっ、ボーッとしない！」

ビクッとして、ふりむいたらサッチがいた。

「なんだっ、おどかさないでよ」

体にわるいじゃん、ただでさえあたしの体はよわつちいのに。

「今、ユツくんのこと考えてたでしょ？」

ドキッ、せいかい。

「ユツくんといっしょに来たいって考えてたでしょ？」

ドキッ、ドキッ、またせいかい。サッチはするどい、だてに8年も友達やってない。

「いいじゃん、来たいって思っても」

ユツくんはあたしのすきな人だよ、問題ないでしょ。

「いいに決まってるじゃん、2人でまた来なよ」

サッチのへんじ、なんだか意外だった。ユツくんにあまえるんじゃない、とか言われる

のかとおもった。

「なあに、その目は？」

サッチがいった、あたしが「なんだか意外」って目をしてたからだと思う。

「さいきん、あんまり怒んないね、サッチ」

あたしがユツくん、ユツくん、っていつても。

「なんかね、あんたたちを見ててわかったの」

あんたたちって、あたしとユツくん？

「ミサコとユツくんはね、はなればなれにならない仲なんだって」
そうだよ、あたしのなりにはユツくんがいるし、ユツくんの
なりにはあたしがいる

んだよ。たぶん、この先も、ずっとずっと。

「だったら言うことないでしょ、あたしがどうこっ」

もうあきらめたから、ってサッチはわらった。あたしもつられて

わらった。

「それに、ミサコもだんだんガマンづよくなってきたしね」

ユツくんのこと以外、ってサッチはまたわらった。あたしもまたつられてわらった。

第13話（後書き）

次回が最終話になります。

この13話から繋がっていくストーリーの予定です。

第14話

いたい・・・いたいよ・・・夜中にあたしの体が急にいたくな
った。体中がいたくて、

息がしにくくなった。ガマンできなくてサッチをおこしたら、あた
しはそのまま救急車で

はこばれた。いつもとちがう病院で、いつもとちがう先生に、あた
しの体をみてもらった。

結果もいつもとちがった、異常あり。

あたしの体は不思議みたいで、せんせいもどこがどう悪いか分か
らないみたいだった。

突発性のなんとかっていわれたけど、ホントはせんせいも分からな
いみたい。どう悪いか

わからないから予防できない、経過をみたいって先生がいった。そ
れっぽい薬をのんで、

それっぽい検査をうけて、それっぽい点滴をして、あたしは病院の
ベッドにねかされた。

あたしは何もかわらなかった、異常信号はつどうちゅう。これがミ
リカせんせいが言っ

たことなんだね、あたしみたいな病気の子は誰もが1回はおおきな
症状をおこすって。

「・・・ミサコ・・・ミサコお・・・」

サッチがないてた、あたしのとおりであたしの手をにぎってくれ
てた。ごめんなさいサ

ッチ、あたしはダメな子だね。きのう、せつかくサッチがあたしを
ガマンづよくなったっ

て言ってくれたのに、あたしはすぐガマンできなくなっちゃったよ。
おこってもいいよ、

これまでみたいに。

朝になつてもあたしはいたかった、もう何時間もあたしはいたい
まま。先生がこまつて

た、あたしの体が不思議ちゃんなせいで。どうしていいか分からな
いから、あたしはそれ
つばい薬をのんで、それつばい検査をうけて、それつばい点滴をし
て、ベッドにねていた。

このままじゃ、あたしがこわれちゃう。ガタがきて、こわれて、う
ごかなくなっちゃう。

そんなのヤダ、あたしがなくなっちゃうなんて。まだ、あたしはや
りたいことがたくさん

あるんだよ。ユツくんと高校生になつて、ユツくんと京都にきて、
その先も・・・。その

先も、ユツくんとずっといつしよにいたい、ユツくんのとなりにい
たい。ユツくん・・・

ユツくん・・・。

「ミーちゃん！」

ユツくんの声がかきこえた、目をあけたらユツくんがそこにいた。
なんで・・・大阪にい

るんじゃないの？聞きたかったけど、あたしは声がでなかった。

「ミーちゃん、まけるな！」

ありがとう、ユツくんがおうえんしてくれたら力がでるよ。がん
ばる、まけない、ぜつ

たい。ユツくんとさようならなんかしたくないもん。

「・・・ミーちゃん・・・」

あたしに何かがふんわりのつかった。ユツくんのくちびるがあた
しのくちびるにのつか

つてた。ユツくんのふつうのくちびるとあたしのふつうのくちびる。
こんにちは、3日ぶ

りですね。さいきん毎日あったのに、旅行してたから3日もござた。

ユツくんのくちびるは柔らかくて、あたしを安心させてくれた。なんだか体がかかるくなっ

た、いたくなくなつた。息がしやすくなつて、体がおちついてきた。先生がおどろいてた、

何がどうなつたのかわからないみたい。

「・・・ミーちゃん?・・・」

ユツくんもおどろいてた、ごめんねビックリさせて。

「・・・ユツくん、ありがとう・・・」

今わかつたよ、あたしの予防線はユツくんなんだね。ユツくんのとなりにいることで、

ユツくんとチユウすることで、あたしはあたしでいられるんだよ。

3日もはなればなれに

なつたから、あたしの予防線がパチンって切れちゃったんだよ。あたしにはユツくんが必

要なの、ユツくんがいてくれないとダメなの。だから、近くにいて

これからも、あたし

とずっといっしょにいて。はなれちゃダメなんだからね、あたしがこわれちゃうから。ユ

ツくんのとなりはあたしの指定席、誰にもすわらせない。そこが、あたしのいるべき場所

だから。

第14話（後書き）

最後まで読んでくださった方、ありがとうございます。
前作「摩れた歯車」と対称的な物語を書こうと思い、
幼なじみ2人のかわいらしい恋を書けたと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2129d/>

リップ・ケーション

2011年6月24日10時55分発行